フリーダムライターズ

　教育とは不平等を是正し、機械の均等を保証するものであるという考えがいまだに一般的に広く支持されています。しかし、教育は不平等を解消するどころか、様々な方法・機能を通して社会の不平等な構図を固定化し、社会階級の再生産をもたらしています。以下では、映画『フリーダムライターズ』を、教育の不平等という観点から社会学的に分析し、映画で観察されるような不平等を助長する教育の諸事象について記述します。

　まず、作中で言及されているウッドローウィルソンハイスクールの変化と凋落は、隠れたカリキュラムがもたらす教育効果の大きさを物語っています。作中の至る所で、学科長をはじめとするウッドローウィルソンハイスクールの教師陣が学校の過去の栄光を懐かしみながらその没落を嘆くような発言をしています。昔はAランク高校であった当校が作中の時点での落ちぶれた姿に成り下がってしまった背景には、“voluntary integration” という多人種受け入れ体制の開始がありました。この体制が始まる以前は当校の生徒はほとんど白人で、学校がある地域の特色と先生の発言から、その生徒たちはおそらく中間層から高所得者層の生まれであったことが推察されます。つまり、多人種受け入れ体制前のウッドローウィルソンハイスクールは高い社会経済的地位を有する生徒の通う学校であり、それを反映して学校文化も教育熱心さと一流志向を特徴としていました。教師が生徒に対して抱く期待も高く、それらが生徒の成長と学業的成功を促し、学校の実績となってAランク校という地位につながっていったのでしょう。これらの社会的成功や教育的成功は言うまでもなく学校の教育メソッドの産物ではありません。もしそうであったら多人種受け入れ体制後も同様な結果を残しているはずだからです。ですが、実際は多人種受け入れ体制を開始してまもなく学校はその社会的威光をほぼなくし、優秀な生徒の75%を失い、すっかりと落ちぶれてしまったのです。学校の以前の成功と、”voluntary integration” 後の没落を偏に説明すると、それは学校文化のなすわざです。受け入れ体制をとってからは黒人やヒスパニック系、アジア系の、全体的に貧しい人種的マイノリティーの生徒が急増し、優秀だった白人の生徒は7割出て行ってしまったため、学校の生徒のデモグラフィックが劇的に変わったのです。学校の生徒の大半がSESの低い家庭の出身となり、多くの子がギャングの一員である親を持っていたのもあり、進学アスピレーションや勉強への意欲は下がり、学校全体の文化として昔までの一流志向は失われて代わりに反学校、反社会の文化が根付きました。教師も生徒に期待することがほとんどなく、代わりに軽蔑と警戒で生徒を目し、これらが全て新たな隠されたカリキュラムとして生徒の教育的成長を妨げる結果となりました。学校文化の変化が学校の急速な衰退を招き、学校へ通う生徒の教育の障害となったのです。

　次に、学校内でのトラッキングが映画で顕著に描かれていました。作中の学校では、クラスがレベル別に仕分けられており、そのクラスによって教育の目指す目標や学級風土が大きく異なっていました。優秀な生徒が集められる”Honorary Class”があり、対照的に学力の低い生徒が集められるクラスも存在し、この物語の中心となったのもそのようなクラスでした。このようなクラスの違いの大きな特徴と言えるのが、下位のクラスでは生徒がほとんど人種マイノリティーであったのに対し、上位クラスでは白人以外は稀であり、白人でなければ教師からハラスメントにあったり能力を疑われたりするというシーンもありました。これは、SESの低い人種マイノリティとSESの高い白人の学力の違いを明確に可視化することで人種的少数者は頭が悪いというステレオタイプを生徒の頭の中で強調し、人種による役割の固定化を促します。また、全体的に学力下位クラスは見下されて期待されず、上位クラスはその優越性が謳われて大いに期待されていました。進学アスピレーションや実績も甚だしく違い、同じ学校内で生徒の学力と将来の選択肢に大きな開きを作ってしまいます。下位クラスには大した教育資源も回らず（映画では本でさえ与えられず、遠足などはもってのほかでした）、下位クラスに入った子は先生からどうせ学校を中退するだろうと考えられており、実効的な学習をするのに環境が不足していたため、勉強によってそのトラックから抜けることができないようになっていました。このように、学校内で敷かれたトラックに乗ることで生徒の将来が実質的に決まってしまうようなトラッキングの現状が、この映画でも尖鋭に描かれています。

　もう一つ、度々この映画で描かれたのが、学校内外におけるラベリングの過程でした。下位クラスの生徒たちは、その入学の時点から学科長をはじめとする学校の教師陣にロクでもない不良であると決めつけられています。これは、学科長が新任のグリュエル先生に教室では真珠を外すようにと指示し、またグリュエル先生から本を借りてもいいか要求が来た時に、どうせ生徒が破壊してしまうと決めつけて貸すのを渋ったところからも見てとれます。このような烙印を押された生徒たちは、予言の自己成就を行い、自ら先生のネガティヴな期待に沿うようになってしまいやすくなります。このような自己成就の例として、作中のマーカスとアンドレの行動があります。マーカスは幼い頃、実際には銃の誤射により死んでしまった親友を殺した罪に問われて少年院に入れられます。その後、彼は少年院を行ったり来たりするようになります。それは、社会が彼に与えた犯罪者という烙印が彼のうちに内在化され、彼が自らその烙印通りの行動をするようになったと説明できます。また、アンドレの例では、彼は彼の兄が無実の罪で終身刑を受けたことに対し、社会が黒人一般に押した烙印を感じ、その烙印を内在化して意識的に麻薬の売買という逸脱行為に及びました。しかし、彼はその後グリュエル先生に自分の低い自己評価を叱られ、自分は、自分の自己評価が示すよりいい人間であるということを主張されます。そして、その後彼は良い方向へ歩んでいったと示唆されています。このように、教員期待が逆に良い結果をもたらすことをピグマリオン効果と呼び、本作ではグリュエル先生が生徒たちの能力や資質を信じていた結果、ほとんどの生徒がピグマリオン効果により成績を大きく伸ばし、社会的な成功も収めるまでいっています。教員期待とラベリング付与の個人の成長への影響は大きなものです。

　では、教師の期待というのは何で決まってくるのでしょうか。様々な要素が加味されますが、作中で伺うことができる教師の期待の源泉としては、人種・民族的アイデンティティ、フォーマルな英語かスラングかといった口語パターン、学力、グループ編成や後光効果といったことがありました。例えば、”honorary class”を教えている男性教師とグリュエル先生が話す場面で、男性教師が人種マイノリティを学校の没落の原因とした上で、彼ら/彼女らの存在を疎ましく思っていることを明らかにしています。また、後光効果では、下位クラスの生徒は多くは親や兄弟がギャングに所属していますが、そのまま子供も同じ道を辿るだろうと期待されます。兄が捕まっているアンドレは、教師ではありませんが母親に、兄と同じ道に進んで捕まるだろうと思われて絶望されるという描写があります。このように、生徒の教育に大いに影響を及ぼす周囲や教師の期待というのも、生徒にはどうしようもできない要因をもとに理不尽に固められてしまうのです。

　教室からは離れますが、性役割の社会化の例もこの映画に見られます。グリュエル先生とその旦那さんがワインを飲みながら離婚を話すシーンがありましたが、その時にグリュエル先生が旦那に、伝統的に妻が夫にするように自分のサポートをしてほしいと要求するのに対し、旦那が “I can’t be your wife” と答える場面がありました。これは、伝統的な性役割が固定化されている夫が、その役割の逆転に耐えかねての発言でしょう。彼には伝統的な性役割に基づく期待する家庭像があり、それから家庭の実情が離れれば離れるほどそれを受け入れることができなくなっていったのだと思います。

　最後に物語の序盤で人種差別的な絵を描いて回していた生徒たちに向けてグリュエル先生が怒ったシーンで、生徒たちは自分たちの生き方を戦争にたとえ、その尊厳を主張しました。生徒たちは戦争の中で生きている自分たちにとって学校ほど無意味なことはないとした上で、戦争の中で戦うことの意義を説き始めました。その中でも特に印象に残ったのが、マーカスのセリフでした。彼は、仲間のために戦い、仲間のために死ぬことをこれ以上ない名誉な行為として、そのような覚悟のある戦士は尊敬に値するといってグリュエル先生に反抗しました。この一連のレトリックが示すことは、教育期待の加熱・冷却モデルを用いて解釈すると、この子供達は教育による地位達成競争から完全にクーリングアウトしており、代替え的価値観を有してそれを基に栄光を掴もうとしているのです。しかし、映画が進む中でグリュエル先生の働きかけに生徒たちが次第に心を開いて反応するようになってくると、だんだん多くの人の勉強意欲が上がり、今までずっと無理だと思われていた大学へ進学する人も出てきたのです。これは生徒たちが先生の呼びかけにより再加熱され、教育による地位達成競争に参入していったことを示しています。あるいは子供達はみんなフリーダムライターズとして執筆活動に励んで本を出版しましたが、その時も以前であれば遠ざけていたような社会的成功を収めようと努力する姿がありました。これは、生徒の再加熱を意味します。生徒が社会に失望し、また自身に絶望して早々に既存の模範的な価値観での成功を諦めてクーリングアウトしたのを、先生が教育を通して再加熱し、社会的成功へと背中を押す過程を描くのがこの映画であります。

　以上で見たように、教育とはいまだに不平等が多い不完全な分野ではありますが、『フリーダムライターズ』は教育のそのような面も見せながら、同時に教育の秘めているポテンシャル、教育の応用の可能性なども示唆しています。教育はそのありようによっては非常に実り多いものとなりえるのです。大事なのは、今の不平等の現実と対峙しながら教育のありようについて真剣に考え、教育をより良いものへと変えるために絶えず努力を積むことでしょう。